



医師会 健康講座

溶連菌
ようれんきん

やくしじこどもクリニック（泉町） 薬師寺 直之

小さなお子さんをお持ちの方は、1度はこの名前を聞いたことがあると思います。また、ご自身も小さいときにこの病気にかかったことがある方も多いのではないのでしょうか。では、溶連菌とはいったいどのようなものなのでしょう。

もともとは、バイ菌の略称で、A群β溶血性連鎖球菌という名前の一部を取り出してつけられたものです。なぜ、風邪などの原因ウィルスや細菌の中でも、溶連菌だけわざわざ略称までつけられて取り上げられるのでしょうか。それは、この菌が引き起こす、困った問題があるからです。

まず始めに、この菌が引き起こす病気の中で、1番多いケースである咽頭炎（いんとうえん）のような症状が出るのでしょうか。咽頭の溶連菌感染症は、春先から初夏にかけて流行することが多く、急なものの痛みと発熱で気づかれることが多いようです。幼児では、発熱

がみられないこともあり、単にのどの痛みを訴えるだけの場合もあります。ここまでは普通の風邪と症状的にはあまり変わりがありません。しかし、のどを診ると真っ赤に腫れ上がり、扁桃に膿が付いたりするような非常に強い病変が現れることが多く、普通の風邪よりも粘膜炎の症状が強くなります。

また、ひどい場合は、吐き気や腹痛、小さなブツブツが首から胸やお腹にかけて見られます。発疹は、ひどくなると全身に広がりかゆみをとまいません。また、舌の表面がざらざらになって腫れ上がり、典型的な場合はイチゴに例えられるような状態になります。このように、普通の風邪よりも粘膜炎や皮膚の病変をとまなう場合が多いようです。

では、このようなブツブツが出るから、手足口病のように普通の風邪と分けられているのでしょうか。溶連菌感染症をほかの病気と分けて取り上げるのは、直接溶連

菌が引き起こす病変が原因ではありません。溶連菌自体の風邪症状が落ち着いた後、溶連菌が引き起こした免疫反応（体を守る働き）が腎臓や心臓、関節などに影響し、非常に厄介な病気（Ⅱ困った問題）が発症してしまうのです。

例えば、腎臓を標的とした続発症である急性腎炎の場合は、頭痛、食欲不振、むくみ、などが急激に出現し、血尿と蛋白尿、尿量減少、血圧上昇があり、発病初期は腎機能も低下します。主要な症状が回復するまでの1カ月間程度は入院が必要です。6カ月程度尿の異常が続くこともあります。

これらの続発症を予防するには、ほかの細菌やウィルスと区別することが必要となるため、溶連菌の検査を行います。溶連菌の検査で陽性になった場合には、免疫反応が過剰に起こらないように、一般には10日間ほどの抗生剤内服を行います（抗生剤の種類によって投薬期間は違います）。もともと

急性期の溶連菌の感染力は強く、家庭内での感染は50%以上だと言われています。また、続発症の恐れがある感染症でもあります。そのため、学校保険法では第3種の感染症として扱われています。

とはいえ、抗生剤内服により1～2日で解熱し、のどの痛みなどの症状も改善しますので、抗生剤開始24時間で明らかな異常（発熱、発疹）がなければ通園・登校が可能になります。また、のどの痛み、発疹、発熱などがなくなれば、特別安静を保つ必要はありません。

しかし、症状がなくなり学校に行けるようになったからといって、抗生剤の内服を中止してしまうと続発症が起きる可能性が高くなります。

このように、溶連菌はさほど強い菌ではありませんが、治療を怠ると長期間の治療が必要になる病気になってしまう可能性があります。毎年のように、溶連菌の流行は起きています。その上、はしかや水ぼうそうのように1度かれば2度とかからないという病気ではありません。小さなお子さんが10日間の内服を続けることはなかなか難しいことですが、頑張って服薬を続けましょう。